
秋の花火

佐和島ゆら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秋の花火

【Nコード】

N9412H

【作者名】

佐和島ゆら

【あらすじ】

高校時代、仲良くしていた克己が東京から地元に戻ってきた。町の秋祭りの日「私」は克己に呼ばれ、森に入ってしまった。

運転してきた車から降りて、ばたんと車のドアを閉めた。

私の目の前には鬱蒼とした森が広がっている。

一応自然公園らしいのですが、森に入るための石畳の道は泥と木の葉で隠れ、明かりは駐車場以外には見当たらない。

昼でも薄暗い場所だが、夜は手に持つ懐中電灯ではあまりにも心もとない。私は深呼吸をした。そして気合を入れて、懐中電灯のわずかな光を頼りに森へと足を踏み入れた。

遠くからお囃子の音がした。

今日は私の住んでいる町の秋祭りだった。

いつもの年なら人と待ち合わせして祭りの会場へと出かけるが、今年人は人の誘いを断ってこの森に来た。

克己と呼ばれたのだ。

克己というのは、私が通っていた高校の友達だ。結構仲は良かったと思う、というか好きだった。

でも積極的に相手に自分をアピールしようとは考えていなくて、私は克己の夢を応援して、克己はいろんな人に迷惑をかけて東京に行ってしまった。

もう……三年も前の話だ。

けれど数日前、突然電話があった。

会いたいと言ってきた。

低く疲れたような克己の声の調子に、私はよくない話だなと思った。

久しぶりに克己と会うのに、嬉しくなかった。

曖昧な感情、ふわふわと頭がぼんやりとして、頭の何処かの部分は痺れたような気がした。

私は気付いちやったのかなあと、克己の気持ちを推測する。

克己は言っていた。えらくかつこよく。

夢をあきらめない限り、この町には帰らないって。

でも…… 克己は帰ってきた。

ただ一人、ずっと変わらずに克己の夢を応援した私に会いたと言ってきた。

まあどういう心情か…… 何となく想像が付いた。

私は他人の器がどれくらいなのか見るのが得意だった。

観察するのが得意だった。

だから他人の器を見るように、私は自分の器を見れてしまった。そして気が付いた。

私、何にもない。

見つけるしか出来ない女だって。

見つけても、相手をどうこうと変える力量は全然無い。

見つけるだけじゃ何も変わらないのに。

だから…… 私はいつも諦めていた。

厭世的な気持ちで世界を見ていた。

傲慢かなあ。

でも、悟っちゃうだよね。本当。

箱庭みたいな世界だから。

予測がつきやすくて……

強い意志って言葉、ちょっと苦手だったりする。

じゃあ、何で応援していたのだろう。

克己のこと。

今更、われに返って考えてみる。

好きなら、側にいてほしいはずなのに。

ああでも何か、見たかったのよね。

あいつ、すごく輝いていたから。

……先が見えていたのに、まったく何を期待していたんだろう。
ひどいよね、つくづく。私は。

蝶になれると信じた蚕を応援するなんて。

上手いけど、それだけの奴なんだ。克己は。

私は歩みを止める。

少し開けた場所に出る。

夜空には満月と星が光っていた。

夜なのに、ぼんやりと周囲は明るい。

田舎でも中々見られない光景に、私は思わず息をついた。

克己は公園に設置された木製のベンチに座っていた。

近づくと共に気が付いたのか、俯いていた顔を上げた。

表情は、満月と星の明かりでは余りよく見えない。

ただとても疲れているのは、何となく感じ取れた。

私は「久しぶり」と声をかけた。

克己は元氣のない声で「ああ……」と返した。

しばらくとりとめのない会話をする。

私に最近あったこと……猫を飼い始めた事について話した。

そして猫の愛らしさを語った。全力で。

本当にはまっているんだなあと、呆れつつも可笑しそうに克己は笑った。私は……ほんの少し安心した。

克己は東京での暮らしを話してくれた。

克己は土木工事の仕事をしていたそうだ。

後で私は、確かに体の各所がごつごつしていると思った。

子供が抜け切らない高校生の体じゃなくて……苦労を積んだ体だと
全身で感じた。

やがて、話が尽きた。
ぴたりと会話がなくなつた。
マツチの火が消えた後みたいだ。
ほんの少しのぬくもりが、さあと消えていく。
聞こえる音は、森の中では秋の虫の音だけ。
克己は口を開かない。
何回か、そつと私を見た。
気付かないふりをする。
どう対応しよう。やったことがないから分からないのだ。
あまり明るくないので分かり辛い、克己は申し訳なさそうな目をしていた。何か言いたげに口を小さく明けたりもした

そんな目をしないでよと私は思った。
何か、心が痛いし。
声をかけ辛かった。
口笛に似た高く抜けた音が聞こえた。
顔を夜空に向ける。
すると満月の隣で、大輪の花が咲いた。
いくつも咲いた。そして小休止。
小さいながらも、花火の提供アナウンスが聞こえた。
秋祭りを飾る名物花火。
美しいが、夏の花火に比べ興奮を覚えない。
夏の花火よりずつと、寂しさがしみる。
切なくなる。胸に静かに響く花火だ。
「きれいな……」私は小さく息をついた。

意を決した声で、私を克己が呼んだ。
そしてごめんと謝った。
あんなに応援してくれたのに……と言った。

私は目をつむった。

何があつたの？ と聞いた。

心が大きく動揺していた。

覚悟していたのに、何だか胸が痛かった。

克己によれば、だまされたそうだった。

何人もの自分と似たような夢をもった人間共々と。

ある日克己は声をかけられた。

専門学校にいた頃から、目をかけていたと男は言った。

才能があると褒め称えられた。

最初は胡散臭さを感じていたが、自分の通っていた学校のこと詳しく、また勢いのある口調に押され、喫茶店で話したそうだった。

男の話は共同で展示会を開こうというもの。

何人もの自分と同じ夢を持った人を応援したいという男の甘言に、克己はだまされた。

何かしらの理由をつけて金を取られて、克己はそれでも最後まで信じた。完全に逃げられるまで信じた。

今考えると自分でも不思議らしい。

何で男をそんなに信じたのだろう。

焦りすぎて馬鹿になっていたと、克己は言った。

その頃、ちょうど克己の実家から手紙が届いたそうだった。

お父さんが体調を悪くして、夢にへばりついてないで帰って来いというものだった。

克己は怒った。なんだそれと。

だけど、少し心がゆらいだ。

もう潮時か？ と思ってしまった。

慌てて打ち消したそうだが。

ただ実際、自分の絵を売り込むアテがなかった。

そして生活のために仕事場に入る日数は増えていく。

信頼が増えていく、収入も中々いい。
だけど……そのお金も、信頼も、自分が望んだ仕事からのものじゃない。

夢のために働いているのに、どんどん夢と現実とは離れていく。
いや自分自身がどんどん現実のまれていく。

そういえば、絵を描くために最後に鉛筆を握ったのはいつだった……

そう思っていた。

そして克己は騙された。

お金と共に気力も失って、克己はこの町に帰ってきた。

ごめんなと呟く克己に、今は何をしているの？ と私は聞いた。とりあえず両親と話して、お父さんのお仕事を手伝っているそうだと。

花火はどんつ、どんと打ちあがっていく。

私と克己はしばらく花火を見ていた。

きれいだなぁと思う。

夏に比べ涼やかな空気の中での花火は、冴え冴えとした美しさだ。
だから……胸にしみる。

打ちあがった後の煙が流れる夜空を見ると、寂しくて切なくなる。
今年は一際、そう思った。

ぼんやりと克己はどうなっていくのだろうと考えた。

このままお父さんの仕事を継ぐことが一番、無難な気がする。

それにしても克己、本当にしょんぼりした肩だ。

見ているだけで、胸の中がちりちりと焼きついたかのように痛い。
何でかなあ、私、こうなること分かっていたのに。

ふと、私は克己が高校の時を思い出した。

克己は本当、大輪の花火みたいに輝いていた。

目をいきいきさせて、私に絵を見せながら夢を語っていた。

なんていうか、惚れた。そういうところ。

美しくて私は、胸の中が落ち着くことはなかった。

だから自分の腕の中に入りたいなんて思わなかった。

克己は大輪の花火。

大輪の花火は、誰かのためだけに夜空に上がるわけじゃない。

……唐突に分かった気がした。

私のこの胸の痛みの正体に。

私は期待していたんだ。

克己が私の偏屈な予測を超えて、一瞬の美しさじゃない花火をずっと咲かせていくことを。

ずっと……願っていたんだ。

私は克己を見た。

克己は自分にあったことを話すと、またしばらく黙っていた。しかし今見ると、肩が震えている。

過去の感情を思い出したのかなと私は思った。

克己の心は容易に想像できる。

傷つきすぎて、何とかバラバラにならないようくっつけても、傷が隙間となってしまうた心。

こういう時はどうするべきなのだろう。

私は久しぶりに迷った。

大概は多分、黙っているか、何かしらの言葉をやるだろう。

だけど深入りはしないように。

他人の問題をいちいち自分に引き寄せるなんて、大人がすることじゃない。そもそも関係ないし。

これからどうなるか予測が出来ない。

だけど私は……克己の肩を抱くように手を置いた。

驚いた克己と目が合う。目元が涙で滲んでいた。

私は優しく微笑むと、克己は静かに顔を伏せた。
押し殺しきれない嗚咽が聞こえてくる。

克己の体温を服越しに感じると、克己の心がより近くに感じる。そして自分の体温が相手の心の隙間に届いてほしいと思う。
本当、どうなるのだろう。これから。

克己は起き上がるのか、それとも落ちていくのかさっぱり分からない。私もどうなるか分からない。だけど、側にいたかった。
罪滅ぼしなのか、過去の恋情の再燃なのか、それとももっとも大きな感情なのか。全然分からないけど。

私は克己の耳元で「冷えてきたね」と囁いた。
克己は頷いて「そうだな」と言った。

花火の音は打ち終わったのか聞こえなかった。
満月は雲に隠れてしまった。

私と克己はベンチから立ち上がり、懐中電灯の光を頼りに身を寄せ合いながら、暗い森の道を進んだ。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9412h/>

秋の花火

2010年10月8日22時52分発行